



猫と本屋



葉

ああ、本当に猫が店主なんだ。

そんなことを考えながら、友達が話題にしていた本屋の前で立ち止まった。茶色く変色し、少し傾いた看板には『まるん屋』という名前が掲げられている。

隣の喫茶店から、苦みのきつそうな珈琲の匂いが漂ってくる。

開いたままの書店のドアの奥。会計カウンタの机の上に、一匹の白い猫が口元をぶるう。と震わせて眠っていた。

扉をくぐると、コンビニのそれのようにベルが鳴り響き、彼の鼓膜が後ろに立った。目を覚ますわけでもなく、ただ慣れたように音だけを拾い、耳の位置はすぐに戻ったのだが。

あたりを見回すと、狭い店内に整頓された本棚が集まっている。

鼻をひくつかせて目を綴じた店主の隣に置かれた、低い本の山は、古い割に丁寧に扱われているらしく、埃一つない。一番上の一冊を手にとってぱらぱらとめくると、端の折れた痕が見える。一枚一枚をまっすぐに伸ばしてたたまれていることから、それらが愛おしさに満たされた指先に触れられていることがよく分かる。手垢をつけてしまって申し訳なく思い、近くにあった布できゅう、と拭き取った。

幸せ者だなあ、お前。本だけど。

主人を失っても、主人を変えても、いつまでも大切にされている本が、なんだろう。どこか羨ましいのかもしれない。

再び視線を目の前の雄猫に向けると、彼はただひたすら心地良さそうに寝息を立てている。もほりとした首に触れてみる、それは皺になった、大きな脂肪の塊になっていた。ぐにやりとした感覚が気持ち悪いようで、面白い。

(まる、だったか)

店主のいない書店、「まるん屋」。

従業員のいないこの本屋は、いつのまにか猫、「まる」——「まるん屋」からもじってつけられた名前だということは、言わずもがなであろう——が居座るようになったことから「猫が店主のまるん屋」と呼ばれるようになり、一時期メディアでも話題になっていた。本を買いに来る人々には不思議と悪意はなく、みな代金を封筒に入れて、レジ横の集金袋に入れて帰るという。

もちろん、まるはあくまで猫である。何もしない。

だが集金袋は毎朝空になっていて、ときどき新刊や、新しい古書が並ぶという話なので、誰かがひっそりと経営していることは確かなのだろう。

小さな商店街の一角にある目立たない書店であるし、ましてやこの町の近くに大型書店が新規開店したことから、余計に客足は遠のき、閉店時間と開店時間には、人は誰も近付かないのである。地元に住んでいる友人らがまる以外の人間を見たことがない、というのも頷ける。とある噂によると、この白い豚猫は（こう表記してしまうと豚なのか猫なのか分かりづらいが）猫の妖精であって、実は人語を解するミステリアス生命体なのだ、という話もあるが、そんな馬鹿な話はないだろう。

猫の眉間を親指で撫でると、少しだけ、喉を鳴らす音がした。

自分を気持ちよくするのは人間の義務だと言わんばかりの、一瞬だけちらりと覗いた左目に、ああ、本当にまる、って感じの猫だなあ。と、少しばかり憎たらしく思う。

まあ、俺は猫がそんなに好きではないから、今のが実際にはどういう意味の行動なのか、理解し得ないのだけれど。

にしても、薄めの綺麗な青色だった。むしろ蒼という感じの、年寄りらしい、濁りのある色。嫌いじゃない。

もしも本当にヒトの言葉が分かって話ができるなら、まるでおじゃる。なんて口調になるんだろう。失礼で勝手な想像だ。

あまり触って起こすのも可哀想に感じて、なんとなく小説の棚を物色する。気楽でいいものだ、人に見られないというのは。

安っぽいインクの匂いと、湿り黄ばんだ紙の匂いが、肺を満たす。

酸っぱいような、それなのに温かな香りに、コンピュータ化が進んで、いつか本がなくなったりしなかったらいいな、と小さな願いをした。

床に、消えかかった、子供の落書きが残っている。丸い本体に、左右の角が二つ生えている、変な生き物。汚い歪んだオレンジ色の字で、横に、「まるちゃん」と書いてあるので、ああ、このブス猫を描いたものなんだな、と納得する。なんだか微笑ましい。

ここだけ時間が止まってしまったかのような空間で、一度だけ深呼吸。

のんびりとした主人を見守る、商店街の人々の温もりに包まれている気がする、だなんて、男の台詞にしては少し恥ずかしすぎるな。

しかし、初めて来た本屋ではあるが、本当に愛されている店なんだな、とはなんとなく気づくことができた。同じ町にありながら、どうしてもっと早く来なかったのだろう、と後悔しなくもないが、残念ながら、「まるん屋」ブームの頃、俺はもっと別のものに夢中だったからな。

……いや。

「……もの、じゃない。か」

一つの顔が過ぎて、思考がだらり。劣化する。

それは一瞬だけで、すぐさま頭をがぁ、と振って、気を取り直して書棚に目を遣る。

ここの店主は時代小説が好きだったのだろうか、妙に幕末云々というタイトルの背表紙が多い。

するすると視線を滑らせて、表紙買いするに値する本はないかと探してみる。さまざまなサイズと、さまざまな厚さの本が一緒になっているが、これはこれで、いろんな発見がありそうで面白い。

指先でどこまでを確認したか、品定めするように、古書を中心に見ていく。

その途中で、あ。と小さく漏らして、すぐさま息を留（と）めた。

どくり、どくり。心臓の収縮が止まってしまうといいのに。耳の傍で急ぎ走る、ヘモグロビンの悲鳴が聞こえる。

そして、急に遣る気がなくなる。学校帰りの両足に倦怠感を覚え、ドアからびう、と入り込んだ、春の近い風に寒気がする。生暖かいのに、まだ北風が入り混じっている。

振りかえると猫の体もふんわりと橙色に染まっていた。

もう、日も沈む。帰ろう。

まろはまた、口元をゆるく震わせ、くう、と鼻を鳴らして寝る体制を整えた。

また来るよ。言葉が通じるはずもないのに、呼びかけるようにして背中を撫でると、尻尾だけが縦に振れて、合図になった。

雲がかかっている。太陽の光も、大分弱々しい。

一足早く店じまいを始めた八百屋の奥さんが、おや、気をつけて帰るんだよ、と皺くちゃの顔をもっと皺くちゃにするものだから、はい、ありがとうございます、と見知らぬ同士で笑顔を交わし合う。

そのあとも、ときどき人々に声をかけられながら、電車に乗った。

駅のホームでは、すでに人と人との境目ができていて、先程のひとときが恋しくなったりもしたのだけれど。

ポケットの中でバイブレーションが鳴る。確認しても、ただのJR線遅延のお知らせを乗せた液晶。

ただそれだけで、メールすら来ない携帯を見て、苦い息を吐いた。

繋がったイヤホンから流れるメロディに意識を預け、ガタン。と揺れる車内で、浅い眠りにつ

いた。

肩に、疲れ果てた隣のスーツの頭が押し掛かっている。

脳の中でぐるり、ぐるりと回っていたのは、人差し指が迷いながらさした、真っ黒な背表紙の「失恋」という恋愛小説。

古川恭也、二十歳。

窮屈な世界に押し込められた俺は、考えることをやめた。

明日には、雲が消えてしまっていればいいのに。

空が、低い。

雨と面影

鮮やかな黄の、もはや剥げかけたミュージックプレイヤーから軽快で、それなのに落ちついたピアノジャズが中の音量で両耳を包み込む。

左手のビニールから、濡れたルーズリーブのプラスチックが覗く。茶色い傘の端を水滴が駆けていった。

整備されていない、ぼろぼろのコンクリートの水が跳ね、靴底を不愉快に湿らせる。降水確率八十パーセント。予報は的中、真昼の太陽は分厚い雲に隠されて、空気は廃棄ガスと共に淀んでいる。

あめは、にがてだ。

片手は塞がるし、ズボンの裾が重くなる。何よりも視界が悪い。モザイクのように目の前を通り過ぎる雨は、交差点ですれ違う人々のように均一な表情をしていて、ただ、横切っていくだけの存在で。遠く、自分が目指す場所すら見えなくなって、唇の皮を食（は）んでしまいたくなる。

距離はそう大きくないのに、手の届かない、出口。

雲の奥で唸る声が聞こえた。

雨脚が強くなる気配に、陰気に髪の毛を乱した自分の顔が映った硝子を押しこんで。重たい音をたてて、喫茶店のベルが鳴った。

*

窓が光り、雷鳴は遅れてやってくる。

叩きつけられた鍵は、一度低く跳ねて彼女の足下に止まった。彼女もまた静止している。音として成り立っているのは彼女の呼吸のそれだけで。

ごめんなさい。

この短時間で何度耳にしたか分からない謝罪の言葉は、唇に乗るほどに軽く感じる。薄く膨らんだカッターシャツの胸元に滲む、黒い染み。

俺に向かい合う細い足は小刻みに震えている。長い髪は後ろで一つに束ねられ、幾筋かがシュシュを逃れて首に垂れ下がっている。

何が起きたのか、俺が何を言ったのか、はっきりと思いだせない。

ただ、出て行け。最後に玄関を指さしたのは覚えている。

彼女は泣いていた。ひたすら、ごめんなさい、と呟いて。

目の前を通り過ぎた横顔は剥げたマスカラで汚れていた。端でちかりと明かりに反射したのは、彼女の薬指に残る、随分前に贈ったシルバーリング。

ソファの上着を片手に少しずつ離れて行く背中はとても小さい。

「ありがとう」

ヒールのない、平らなローファーを履いて、彼女はノブを回した。

*

街中を雨宿りもせず大きな笑顔で走り回る子供らが窓越しに見える。一人肥えた子のジーンズがぐっちゃりと変色して、それなのに彼らの表情はとても明るい。

店内は静かだ。最近流行りの甘いラブソングがこげ茶色のコーヒーを包み込み、指の腹に感じるのは、熱いくらいのカフェイン。白い陶器のカップに、満月のような水面があり、そこに自分自身がいた。唇に傾けると、その姿は揺らぎ、掻き消えてしまうのだが。

また外を一瞥して、湿気を帯び濡れた髪をぶんぶんと振りまわす子供たちのやわらかな世界に安堵する。

そういえば、昔は雨が好きだった。

太陽を背にした雲が安穩とした青を遮って、天井を広く覆っていく。最初は薄雲だったはずなのに、それはだんだんと厚みを帯びてきて、いつのまにやら錆鼠色。

おや暗い、と思ったところでぽつり。ぽつりと涙し出して、ざあざあと堰を切ったように号泣するのだ。ときどき、鋭く重い嗚咽を漏らしながら。

空が泣いている。悲しいことがあったのかもしれない。

だから俺は笑おう、あめんぼと一緒に走ろう。

そんなふうにして声を大にして空の恵みに肌を横たえていた時期があった。今ではその感覚すら忘れてしまっているのだが。

ずっと大好きだと思っていたサッカーボールも、いつのまにか見えなくなっていた。

これが大人になるということなのだろうか。

大切な感情を抑えるうちに、その存在すら希薄になり、遠く拡散してしまう。一日いちにちを長く感じていたのは、毎日が発見の連続であったからなのかもしれない。

—もう、日々は単調な流れ作業でしかない。

「お皿をお下げしますね」

「ああ、はい、どうも」

ポニーテールに髪を結わえた店員が空いた食器を片づけていく。その華奢な左手で指輪が光に反射してきらめいた。

彼女は、いったい、どんな気分で俺に別れを告げたのだろうか。

ふと残った店員の匂いは、彼女のそれとは全く違っていて。どんなにみじめな顔をしていただろうか。飲み干したコーヒーカップに自分の顔は映っていなかった。

「会計をお願いします」

彼に、会いに行こう。

*

あら、いらっしゃい。と俺を迎え入れたのはふてくされたでぶ猫ではなく、恰幅の良い柔らかな物腰の中年女性だった。

どうも、と挨拶らしくない挨拶をするも、彼女は目尻に皺をつくり作業に戻る。いつもまろが寝ていると思わしきカウンタの上で古本を片す様子は手慣れていて、緑色の鮮やかなエプロンがよく似合う。しかしそこに彼はいない。

「まあ太はね、今日は外出中なの」

猫を探し目を泳がせる様子に気づいたのか、女性が答えた。

「まあ太」

「ここの猫の本名よ。みんな屋号にちなんでまろ、って呼ぶけれど、本当はまあ太」

「ええと、あなたは」

私はここの経営をしているの、みどりよ。

みどりさんは、人の良さそうな微笑みを更に深くして少女のように首を傾げた。白髪混じりの髪が耳から零れ肌に落ちる。同時に後ろで一つに結わえられた束が銀色にさらさらと揺れた。

僕は恭也です、と拙い自己紹介をすると、まるで息子を見るような目であらよろしくね、とまた髪を揺らす。

「あなた、まあ太に会いにきてくれたのね」

小さな歩幅が本棚へと赴き、手に持つ大量の本を丁寧にていねいに挿し入れていく。

「はい、なんだか会いたくなってしまうて」

背伸びをする姿に、どこに入れますかと問えば、そこをお願い、ありがとう。と母親の匂いがした。

積み上がった書物。カバーがぼろぼろであったり、真新しかったり。陽に褪せたそれは、どんな歴史を持っているのだろう。著者の人生、読者の人生、いろんな人の生を点々と渡り歩いて、たどりついたここ、まるん屋。そこでまた、シェルフの中でひたすら新しい主人を待つ。たくさんの訪問者に触れながら。

「ここはね、主人のお店なの」

時代小説の背表紙に指を預け、彼女が忘れ物を思い出したように呟いた。

今はもう、天国だか地獄にいるんだけれどね。とつけ足して。

「まあ太は、彼の猫。今はもう、ここに居ついてしまっているみたいだから、私がときどきお店の管理とまあ太の世話のために顔を出すのよ」

「みんなが、まるん屋は猫が店主だって」

「あら、そんな風に言われているのね。私が辺鄙な時間にばかり来ているからかしら」

口角を上げた表情はゆるり、あまいかおり。

彼の形見だと思えば、あの子はきっとそう。まるん屋の主人なのかもしれないわ。

本棚にそっと体を寄せるみどりさんは、恋人を見つめる瞳をしていた。見ているこちらの息が詰まりそうなほどに。

それは苦みの残るカラメル色をしていた。

雨が地面を強く叩く。

責め立てるように絶え間なく。

気だるさを生む湿度が、より一層、ひとりを強調しているような気がして。

思わず口にしてしまった。

「まだお若いのに、ご主人を失って。寂しく、ないのですか」

「寂しいわ。けれど、満たされているの」

出会ったことを後悔していない。伝えたいことは全て伝えきって、その上で離れてしまったのだから。

「それでも、もっと、愛してるって言えば良かったと思うわ」

――一時。

「一時、二十代のころだったかしら、彼を嫌いになったことがあったの。ひどいことを言ったわ。けれど、その晩泣いてしまった。大好きだったことに気付いたのね。次の日に謝ったわ。彼は笑ってた。そんな素直なところが好きだ、って。それからはずっと言いたいことを言ってきたわ。好きなこと、不満なこと、我慢って時には大切だけれど、本当にわかり合いたいなら、口に、行動にして示さなきゃ。後悔はないわ。今もあの人が好き。私が彼に会えるまであと何十年とかかるでしょう。もしかしたら会えないのかもしれない。けれどそれでもいいわ。愛しているの。まあ太も、私も、彼を。それだけで救われるわ。けれど、覚えていて。いなくなってしまった人のことは、思い出せても会話はできない。伝えきれて言いたいことが伝えられるのは今だけなの。忘れないで」

ふわり。

向日葵のように綻んだ、あたたかな唇に、沢山の感情が緩み、溢れてしまいそうになる。

「……」

「あら、まあ太。帰ってきてたの」

いつの間にか、でぶ猫は机に置かれた本を枕にして、顎を乗せて寝ていた。

ときどきに鼻をぴくつかせては、口元を歪め穏やかな寝息を立てる。おかえりなさい、とよれた手に撫でられる様子は、幸せそのものだった。

「いい顔をしていますね」

「ええ。主人がいなくなったころは不安げにいろんなところに彼を探していたのだけれど、少し経つと……猫も死ぬということがわかるのかしらね。こんな風に穏やかに生活をするようになったの。主人の気配が残る、この店で」

夜が近づいている。雲の厚みが時間感覚を狂わせている。

けれども、確実に夜は近付き、朝が傍に寄り添っている。

ふと視線を上げると、まだ、黒の背表紙が呼びかけてきていた。安っぽい、それなのに心地良い小鳥のような声で。

手にしてみると、黄ばんで、折れて、中にかすれたマーカーで線が引いてあって。様々な人の心にするりと入り込んだ足跡。

失恋。

一方的な感情を虚構と一緒にぶちまけて、捨ててしまったのは彼女の誠意と、自分の本音だったのかも知れない。認めたくなかなっただけで、本当は、気付いていた。

血が、ゆったりと巡り出す。脳に沁み渡っていく苦みにも似た酸素。

目の奥が疼くのは、堰きとめている気持ちがあるから。

「この本、いただきます」

お買い上げ、ありがとうございます。

とぼけた仕草に、安堵と、決意。

雨が溶けていく。

猫が、大きな欠伸をした。

――あいしてる、あいしてる、あいしてる。

三度、五度、何度も口にして、もう唇は乾いてしまったわ。

海のように深い夜が私を、地球ごと包み込む。目の前を泳いで往ったウーパールーパー。やわらかなピンクをしていた。

酸欠状態で指先が青くなってゆく。甘い感傷が痛い。

濁り切ったところに刃を刺してみる。奥の方で硬いものにあたって、取り出してみると透き通った恋心の破片。

たくさんのところに刺さっていたから、痛かったのだ。ひとつひとつをかき集めて、組み立てる、とても小さなパズルピース。

ぼろり。

瞳から零れた酸素。

できあがったのは、あなたへの、変わらぬ愛でした。

陳腐で、それなのに触れると容易に私を、あなたを傷つけた。弱弱しい私自身。

「まだ、だいすきな」

綺麗事とはいえ、思い続けさせて。

――……。

(『失恋』 第7章「綺麗事とはいえ」 より抜粋)

昨日の雨が嘘だったように、地面はからりと乾いている。

地元の道がいつの間にか舗装されていた。軽い足音に、頭がすうと冴える。耳に、イヤホンのピアノが心地良い。

雲は一つもなく、見渡す限りのコバルトであった。

商店街の一角に佇む、寂れた、優しさの漂う書店、「まるん屋」。俺はまた、この扉を押していた。

猫の主人は、いつもの無愛想な様子で日の当たる床で横になっていた。よう、と声をかけると、曲がった尻尾を縦に一度揺らし、皺のある眉間に力を入れてうすらと目を開く。今日も、年若い蒼色をしていた。

「俺さ、二年付き合った彼女がいたんだ」

ぐにやりとした脂肪を地面に押し付けたまま、彼は耳をこちらに向ける。聞いてやるよと言わんばかりに。

彼女との別れは突然だった。好きな人ができたのだと、自室で告げられ、激昂した。

ただただ自分の主観に満ちた、自己防衛の罵詈雑言を放ち、それから二カ月。かからない電話を気にしながら、独り善がりの思いを抱えて過ごしていた。

「裏切りだと思ったんだ、ずっと、傍にいるんだと勝手に勘違いしてた」

別れが必然だということを、恐れて、無意識の奥底に事実を隠蔽して。

彼女への気持ちを、怒りという名の虚像で代用しようとしていたのだ。

過去形にしたのは、その事実に気付いたからで。

「馬鹿だな、俺」

客のいない店内に響くのは、たった一つの確かな声。

白い柔らかな毛が時折風に揺れる。店の奥に伸びる、大小二つの影。

耳はまだ、こちらを向いている。

「急にさ、そう。悟るっていうのかな。わかった」

彼女が好きだ。

苦しんだ末に最後に辿りついた答えは、とても簡潔なものであった。

ただ単純な「好き」が呑み込めた瞬間に、重く圧しかかっていた気圧のような、水圧のようなものの堰が切れ、溢れだした。血が再び体を巡り出し、生まれてきたものは――

「幸せなんだよ」

気管を詰める切なさ、届かない恋しさ、たくさんの抑えこんでいたものが循環し始めたのだ。すると、離れてしまった現実を感じていた喪失感が、心からの慕情であったのだと実感する充足感へと変わっていった。

幸せだ、ともう一度、自分に確認するように口にする。

「俺も、お前みたいに。失ったものを抱えて、生きていけるかな」

言葉となって、空中に溶けていった問い。

返事は期待していなかったのに、まろはふと、みどりさんに似た丸い瞳を見せて、「みゃう」と低く呟いた。

ありがとう、と頭を撫でた途端にむすりとそっぽを向き、立ち上がり去っていったのだが。

子供の落書き。遠く、魚の匂い。コーヒーの囁き。
のそりとした、猫の背中。

「また来るよ」

初めて会ったときのように、歪な尻尾だけが縦に振れて、合図になった。

*

白を基調にした部屋は、無垢の匂いがした。

来客のたびに、男の部屋ではないと言われる程度には整頓されたソファの上に、あの小説が水色の付箋をいくつか挟んで置かれている。

照明を消したこの空間で、絨毯にうすら光を灯すのは、優しい月明りひとつ。天井は、都会には珍しい、自然のプラネタリウムだった。星々が静かに燃えている。

手に、堅い感触がするのは、携帯電話を握り締めているから。

発信ボタンを押した緊張感に、てのひらが汗ばんで、滑ってしまいそうだ。

「……」

三度目のベルが、途中で途切れた。

聞こえてきたのは、変わらず鮮やかな、彼女のもしもし。

「もしもし、俺だけど」

『恭也くん、良かった』

——良かった、安心した。

それが、彼女の最初の台詞だった。

それが、やけに顔を熱くした。

いつも聞いていた、きらきらとした宝石のような声。

それがまた、鼓膜を震わせる日が来るとは、思っていなかった。

指先は酷く冷えていて、なんとも情けない自分がある。

大きく深呼吸。きゅう、と力を込める。

「勝手なことだとは思う。けど、伝えたいことがあるんだ」

電波越しに語った決意に、彼女は、うん。と穏やかに相槌を打った。

*

謝らなければいけないこと、今まであったこと、その過程でどんな風に気持ちが変わっていったのか。

そんなことを詰まりながら話した。遠く、近い彼女は何事もなかったかのように、そっか、うん、と黙ってぐちゃぐちゃな言葉に耳を傾ける。

短針は一を差している。時間も、遅い。

「もうそろそろ、寝ないとな」

『そうだね、もう夜中か』

「優子」

一つだけ、最後に我儘を言ってもいいかな。

「君を、もう少しだけ、好きでいたいんだ」

いたい、それは願望。

願いである以上、叶えられなくては孤独なままの存在で。

引き出しの奥にしまい込んでいた指輪を取り出す。『一緒』を約束した、あのころの形見。

数秒の沈黙に、ありがとう、と彼女の声が消え入りそうに届いてきた。

感謝しなきゃいけないのはこっちだよ、今までありがとう。自然と舌が回って、紡いだ言葉は自分のものとは思えないくらいに優しい。

スピーカー越しに小さな嗚咽が聞こえる。それはきっと、深海で溢される人魚のように純粹な涙。

泣くなよ、あんまり泣いたら彼氏に合わせる顔がなくなるぞ。

茶化すように声をかけても、セピアに滲んでいくのは、形を変えてなお残る、二人の絆。

胸元に、橙の温かさ。芯が揺れ動いて、目頭に淡いねづ。

ああ、幸せなのだ。

君を、好きでいられる、幸せ。

「だから、君も、幸せでいて」

重たい選択に苦しみ、もがき、その末に得た足りる日々を。

左耳に、聞きなれた泣き声。右耳に、夜のさざめき。

水晶体に映したのは、まるく、まわる、君への銀色の憧憬。

窓の外にそれをかざしてみる。指輪に捉えられた月は太陽の力を借りて、宇宙を同じように光に濡らしているのだ。

些細な出会いに触れた眼は、気付いたときには世界の色を変えていた。

鈍く、昏いヴェールを脱いで、鮮やかな極彩色へと。

確実に朝が近づいている。刻一刻と。

それは残酷で、同時になによりも強い治癒力を持って。

明日には目が腫れてるぞ、と笑いながら、涙は頬を伝っていた。

しゃくりあげずに、平静だけを装って。

最後まで、格好をつけさせて。

「そういえば、君に教えてもらったジャズ。あれ、本当に綺麗だな」

とぼけて、嘯いて。

結局のところどうしようもなく格好の悪い自分に苦笑しながら、液晶にキスを落とした。

温かな痛みを抱えながら、明日も、明後日も、俺達は酸素を取り込み息をする。

月と君。

君たちは、どこか、似ている。